研究ノート

「愉しみの読書」を中学・高校で推進する上での矛盾と課題
－朝の読書および青少年読書感想文コンクールの分析と考察－

桜井　政成

Contradictions and Challenges in Promoting "Reading for Pleasure" in Junior High Schools and High Schools: Analysis and discussion of the Morning Reading and the National Youth Book Report Contest

SAKURAI, Masanari

Abstract

Previous studies have shown that "reading for pleasure" plays a significant role in improving teenagers' reading comprehension and provides them with a variety of pleasures. In particular, reading more fiction than nonfiction is considered more important for improving reading comprehension. However, in junior high schools and high schools, there is an inconsistency possibility in the promotion of reading for pleasure, due to teacher's discipline and the genres tending to be marginalized.

This study focused on "morning reading" (school-wide simultaneous reading activities) and book report contests among reading promotion activities in junior high and high schools to clarify how "reading for pleasure" is handled. The survey revealed that fiction books dominated in the list of popular books for "morning reading". There were also many books in genres that are often marginalized. Meanwhile, more than half of the prize-winning books in both the junior high and high school book report contests were fiction, but none of them were in genres that tend to be marginalized at schools. This may send a double-bind message to students junior high and high school that books for pleasure are different from books that are valued by the school (or society).

1. 研究の背景：中学・高校生と読書

読書は青少年の読解力向上に大きな影響を与えていることが多くの研究から明らかにされている（Mol and Bus 2011; Torppa et al. 2020）。このため読書の推進は教育上重要と考えられてきている。「学校読書調査」[1]の結果によれば、中高生の不読率（本をまったく読まない者の率）はこの20年の間に改善されてきていることが分かっている。1997年には中学生・高校生ともに不読率はピークであり、それぞれ中学生55.3%、高校生69.8%であったが、2022年には中学生18.6%、高校生51.1%までその割合が下がってきている。とはいえ、とくに高校生においては、2022年でも半数程度は1ヶ月間に1冊も本を読んでいない。

また成人し、大学生や社会人となってからの不読率も一定の水準のまま推移している。全国大学生協連が毎年行っている「学生生活実態調査」（1963年よりほぼ毎年秋に実施。全国の国公立および私立大学の学部学生対象）によれば、2022年度の大学生の1日の平均読書時

間（電子書籍も含む）は 32.7 分で、読書時間「0 分」は 46.4% であった。この不読率の割合は 10 年前から比べると約 13 ポイント増加しており、ここ 5 年程度は高止まりしている傾向となっている。また、読売新聞が 2023 年 8 月から 9 月にかけて行った「読書推進月間読売世論調査」（18 歳以上対象、回答者 2062 人）によれば、1 か月間で本をまったく読まなかった者の割合は 53% であり、前年とほぼ同じ結果だった。このように大学生・社会人の不読率は高校生の不読率と大差ないものであり、したがって中高生の時期における読書経験がその後の読書習慣に一定の影響を与えていると推測してよいだろう。

不読率を下げるために、中学・高校ではどのような取り組みがなされるべきなのだろうか。そのひとつに読書を愉しむこと（Reading for Pleasure；RfP。以下、「愉しみの読書」とする）[2] の推進があげられる。学校生活の中でいかに読書に親しむかは、その後の読書習慣を形作るのに重要であると考えられている。Zare et al.（2023）は大学生を対象に、読書体験の記憶と現在の読書習慣との関連性を調べた。その結果、小学校と高校時代の読書に関する好ましい記憶と、現在の読書習慣との間に、正の関係があることが示された。逆に、高校時代の好ましくない記憶は、現在の読書習慣に熱心でないことと関連した。こうした調査結果から Zare et al.（2023）は結論として、学校での読書指導は長期にわたる記憶を形成し、その記憶は大人になってからの活字への接触と、意味のある形で関連することが理解できるとしている。

こうした愉しみの読書が日本の学校教育内で取り入れられたのは、1980 年代以降であったとされている。野口（2009）は小学校・中学校における読書指導実践の歴史的推移について、全国学校図書館研究大会の報告事例から分析を行っている。それによれば、従来の読書指導では読後の活動に重点が置かれたが、1980 年代から 1990 年代前半にかけて、「読書の楽しさに触れる」ことや、「読書そのものと向き合う」ことが見直されたこと。また、全員で同じ本を読むことを強要することへ賛否両論が生まれ、自由読書が重視されるようになったことを指摘する。そして 1990 年代後半からは、「ゆとりの時間」を活用した全校一斉読書活動が「朝の読書」として全国的に広がっていったとしている。そしてその全校一斉読書活動が、中高生、とりわけ中学生の不読率減少の大きな立役者になったという評価がされてきている（薬袋 2012 など）。

そもそも中高生はどのような本を好んで読んでいるのであろうか。『平成 28 年度 子供の読書活動の推進等に関する調査研究報告書概要版』（株式会社浜銀総合研究所、2017 年 3 月）によると、どのジャンルもあまり読まないと回答した者を除いて集計した結果、最も割合が高かった分野は「詩集や小説、昔話・物語の本」で、中学生では 73.9% と高校生では 78.0% となっており、圧倒的にフィクションを好む傾向にあった。ノンフィクションは選択肢が細分化されていることも割合が低い一因と考えられるが、そのなかでも最も高い割合のものは「音楽や料理、スポーツなど趣味に関する本」で、中学生では 38.2% と高校生では 34.7% となっていた。それ以外のノンフィクション分野は中学・高校生ともに 10％台かそれ以下であった。

さらにジャンルを細分化して尋ねている『読書活動についてのアンケート調査報告書』（札幌市教育委員会中央図書館、2020 年。市内の児童・生徒 2,046 人対象）を参考にすると、好きな本・図書館に置いてほしい本について、中学生・高校生では「童話、物語、小説」がそれぞれ 63.4%、70.5% と最も高く、前述の調査と同様フィクションが好まれる傾向にあった（複数回答）。それ以外では、「ノンフィクション（実際にあった話）」（中学生 37.0%、高校生 26.6%）、「ライトノベル」（中学生 24.3%、高校生 24.5%）、「哲学・心理学（なやみや心について考える本）」（中学生 20.5%、高校生 23.1%）が高い割合であった。

こうした状況に対して、不読率は改善したものの、中高生の読書の「質」を問題視する言説もある。折川（2019）は『学校読書調査』の結果から、1960 年代に比べて 2010 年代には、中学生の読書対象が名作・古典からライトノベル・ライト文芸へ変化したことを指摘する。そして、そうした現在の中学生の読書には、大量消費型の単なる娯楽の傾向が強いと批判している。また大橋（2016）は、中高生が好む読み物にライトノベルがあるが、ライトノベルは「初等教育程度の読解力があれば誰でも読むことができ、誰でもみつけることができるように書かれた要素に反応しただけであり、国語教育的な読解、およびその能力の向上は期待するのは難しい」（p.16）としている。そして、ライトノベルとその関連書籍は「あくまで読書の入り口、あるいは娯楽としての読書として

以上の機能をもたせることは難しい」と主張する[3]。

こうした批判が的を射たものであるかどうか判断するためには、より詳細で実証的な分析が必要となるだろう。しかしいずれにしても、学校でどのように愉しみの読書が推進されているのかが明らかでなければ、その先の議論はできないと考える。そこで本研究では、中学・高校の読書推進活動のうち、「朝の読書」（全校一斉読書活動）および読書感想文コンクールに焦点を当てて、愉しみの読書がどのように取り扱われているかを明らかにする。それによって、今後の中学・高校での読書推進がどのように行われるべきかの基礎資料を提供したい。

本論考の構成は次のとおりである。まず次章では先行研究の考察を通して、愉しみの読書が読解力向上に大きな役割を果たしていることや、様々な「喜び」をティーンエイジャーに与えていることを説明する。第3章では調査の目的・方法として、愉しみの読書を学校で推進する上での矛盾と課題について、日本の中学・高校での現状を理解するために、朝の読書および青少年読書感想文コンクールを取り扱い、それぞれの取り組みにおいて公表されている記録から分析を行うことを説明する。第4章ではその調査結果を述べ、第5章で考察とまとめを行う。

2.「楽しみの読書」が青少年の学力等へもたらす影響：先行研究の考察

愉しみの読書は学力、とりわけ読解力の向上に役立つとされてきている。深谷（2011）は、言語習得には多読が重要であるとされるが、すでに多くの国内外の研究が、多読の効果の源泉となるのが愉しみの読書にあると主張していることを紹介し、愉しみの読書は多読の「要諦」であると述べている。

またCheema（2018）は、65カ国を対象に、2009年のPISA（国際学力調査）のデータを用いて、読書好きであることが青少年の読解力に与える影響について調査している。その結果、読書好きの程度は読解力の有意な予測因子であり、国レベルで読解達成度の変動の18%を説明できるものの、その関係のパターンには国によって有意差があることがわかった。性別や社会経済的地位の影響を除いた上で、国別に読書好きの程度が読解力に与える影響を調べたところ、主に高学力国や平均学力国において読解達成度と正の相関があり、低学力国では負の相関がみられたとしている[4]。なおCheema（2018）の調査結果では、似た文化圏の国や地域は似たような傾向を持つことも明らかにされており、日本は香港、韓国、シンガポール、台湾といったところと似た傾向にあり、やや高い読書好きの程度とやや高い読解力を比較的示していた。

しかし先述のように、中高生が好むジャンルの本では読解力が身につかないという指摘も国内ではある。これに対しては、実証的に多少の反証が示されてきている。たとえばJerrim and Moss（2019）は、2009年のPISA（国際学力調査）のデータを用いて、OECD加盟35カ国の15歳において、5種類の文章（ノンフィクション、フィクション、新聞、雑誌、コミック）を読む頻度が読解力とどのように関連しているかを調査した。その結果、ほぼすべてのOECD加盟国でフィクション（小説など）をよく読むことがPISAの読書得点の上昇につながるという強い証拠を得ている。なおそれは、潜在的な交絡因子（性別や家庭環境、学校の質など）を幅広く調整した後でも同様であった。一方、他の4つの文章タイプでは、このような正の相関は一貫して観察されず、読解力向上に明確な効果がないことが観察されたとしている。このようにフィクションのみが読解力と正の相関があった理由については、フィクションは他の読み物に比べ比較的文章が長いからではないか、とJerrim and Moss（2019）は推察している。

Jerrim and Moss（2019）の結果は興味ある本の多読の重要性を示す、ひとつの証左であるといえる。しかしこの調査結果はフィクションの多読が読解力向上につながるという「フィクション効果」（Jerrim and Moss 2019）については説明するものの、それがライトノベルのような「軽い」読み物にも適用できるのかは不明のままとも言える。

ただし、愉しみの読書から得られる恩恵は読解力向上だけでない。それ以外の、多様な「効用」を青少年にもたらしていることが先行研究では指摘されてきている。たとえばvan der Kleij et al.（2022）はイギリス・バーミンガムの11歳から13歳を対象に調査した結果、フィクションの読書量は他者の思考、感情、欲求を理解する「心の理論」（Theory of Mind：ToM）と関連していたことが明らかとなった。なおノンフィクションの読書量は関連していなかった。またIvey and Johnston（2013）は、魅力的なヤングアダルト文学を自分で選択し、自分

のペースで読むことを優先させた国語授業の成果として、生徒の内的な成長を挙げている。この研究はアメリカ中部大西洋岸のある公立中学校２年生を対象して調査が行われたのだが、その結果、程度の差こそあれ生徒たちは自己変容を認識しており、自分自身の成長、言い換えれば自分自身の人間性と将来の物語に関して主体感を感じていたとしている。この結果から Ivey and Johnston（2013）は、学校で読書への没頭やフィクションの役割を軽視していることを批判し、自由読書を推奨している。

さらに Wilhelm（2016）は、アメリカ西部中規模都市の８年生（中学生）の読書経験を、インタビュー調査によって質的に分析している。その結果によれば、学校では疎外されがちなジャンル（ロマンス、ディストピア、ファンタジー、ヴァンパイア、ホラーなど）の読書を含む自由な読書は、子どもたちにさまざまな種類の喜びを与えていた。その喜びは次のように５つに分類されている。すなわち、遊びへの没頭の喜び、知的な喜び、社会的な喜び、創作の喜び、内省（インナーワーク）の喜び、である。

まとめると、フィクションを読むことは読解力向上へよい影響があると考えられるが、しかし軽い読み物（ライトノベル等）の多読でも効果的であるかは先行研究において不明確である。他方で、愉しみの読書は青少年に人格的な成長の他、多様な「喜び」を与える、意義あるものであることが明らかとなっている。

こうしたことから学校での愉しみの読書の推進は重要と考えられるが、しかしそこには矛盾が存在している。それはまず、そもそも学校で読書を愉しむことを教えられるのか、という根源的な問いがある。強制した時点で読書を楽しめない可能性があるし、またそれは、教師や学校のための読書となってしまうおそれも大きい。Cremin（2020）は、若い人たちが、教師や制度のために読書を楽しむようになる危険性があるために、愉しみの読書や、読書への没頭を義務化することはできないと述べている。

またそれに関連して、学校では教育上有意義なジャンルの本しか読ませたくないという指向もある。先にも紹介した Wilhelm（2016）は読書が様々な「喜び」をティーンエイジャーに与えていることを明らかにしたが、しかし学校ではそのうちの「知的な喜び」だけに焦点を当てているために疎外されるジャンルがあり、その結果、若い読者の生涯の読書の動機付けを怠っていると指摘している。この点について、Wilhelm（2016）は生徒たちが学校での読書を自身の愉しみの読書とは区別し、別物として扱っているさまを次のように記述している。

> *私たちの情報提供者たちは、学校での読書と「本当の読書」（カリーの言葉 ※筆者注 調査対象生徒の一人）の間に厳しい一線を引いた。学校での読書は、やらなければならない読書だった。それは選択肢が決まっていて、「教師がすでに知っていることを推測する」ものだった。楽しみを伴うことはほとんどなかった。本当の読書とは、人生の旅路に役立つ読書であり、自由な読書であり、ここに述べた５つの喜びのすべてに浸れる読書であった。*
> （Wilhelm 2016: 36）

このような矛盾があるとされるなかで、日本の中学・高校ではどの程度、生徒たちの愉しみの読書を実質的に推進できているのであろうか。その実態を次章で分析する。

3. 調査の目的・方法

本研究では愉しみの読書を推進する上での矛盾と課題について検討することを視野に、日本の中学・高校での現状を理解する目的で、「朝の読書」および「青少年読書感想文コンクール」を取り扱い、それぞれの取り組みにおいて公表されている記録から分析を行う。

この２つの取り組みを対象とする理由は、第１に、実施している学校が多いためである。文部科学省総合教育政策局地域学習推進課『令和２年度「学校図書館の現状に関する調査」結果について（概要）』（2021 年７月 29 日発表、2022 年１月 24 日修正）によれば、全校一斉読書活動の全国での実施状況は 2020 年度末現在、小学校で 90.5%、中学校で 85.9%、高校で 39.0% となっている。またそれらのうちで朝の始業前に実施している割合は、小学校の 61.0%、中学校の 68.5%、高校の 64.4% となっている[5]。他方で読書感想文コンクールの実施（応募）についての、全国的な学校での実施状況に関する調査結果は、文部省児童生徒課『平成 19 年度「学校図書館の現状に関する調査」結果について（概要）』（2008 年４月 21 日公表）まで遡る必要があり、より最近の状況は

把握することが難しい。しかしながらその調査時点においても中学校の 40.4％、高校の 46.0% が実施しており、読み聞かせやブックトーク、必読書・推薦図書の指定といった、他の読書活動推進の取り組みと比べて実施校の割合が高かった。とくに高校に至っては、同調査結果においては全校一斉読書活動の実施状況（36.9%）よりも高い割合であった。

2 つの取組みを分析対象とする理由の第 2 として、両方とも学校現場での取り組みでありながら、読書に対する位置づけが対比的に異なっていることである。「朝の読書」を先駆的に実践し全国に広げた林（2007）によれば、読む本を子供が自由に選ぶことが推奨されており、そのため「朝の読書」ではある程度、子供の興味関心を反映した本が読まれていることが推測される。他方で読書感想文コンクールは、他者が「評価」する取り組みである。そこで読まれるジャンルは、愉しみの読書による自由な選書に比べて、より学校文化の影響が強く反映した望ましい「良書」が選ばれていると考えられる。ただし、朝の読書を含む全校一斉読書活動においても、「読書を強制されること、読む本を制限されることへの抵抗感」によって読書嫌いになったという逸話も先行研究では語られており（吉田 2020）、そのことからも愉しみの読書がどこまで実現できているかの検討は必要と考える。

これらの調査対象についての取り扱うデータは次のとおりである。まず朝の読書では、朝の読書推進協議会が行った調査結果を株式会社トーハンがインターネット上で公表していた、2012 年度から 2017 年度にかけての「『朝の読書』で読まれた本ベスト 20」を中学・高校ともリストアップした。それらは中学校が 129、高校が 137 の計 266 作品となった。なお 2018 年度以降もトーハンは朝の読書で読まれた本をネット上で発表しているが、発表形式が 2017 年度までとは変わってしまっており、それまでの分と合わせて集計し分析をするのは望ましくないと考え、2017 年度までの分を対象とした。

また青少年読書感想文コンクールでは、「第 69 回青少年読書感想文コンクール」サイト、ならびに公益社団法人全国学校図書館協議会サイトに掲載されている 2008 年度から 2022 年度にかけての中学校の部・高等学校の部での自由読書での入賞作品をリストアップした。課題図書を除外し自由図書のみにした理由は、課題図書は毎年フィクションとノンフィクションがバランスよく提示されており、下記に述べる分析ができないと考えたためである。なおリストアップによるデータベース化では個人情報保護に配慮し、年度と作品情報のみを収集し、感想文の著者等の個人情報は省いた。それらは中学校が 170、高校が 161 の計 331 作品となった。

分析期間が双方で異なっているものの、分析を行うに値するだけの量がそれぞれのデータでは集まっていることや、おおよそ 2010 年代の状況が把握できる分析となっていることから、問題はないと考えた。またどちらのデータでも、年ごとに掲出された該当作品をそのままリストアップしている。そのため、年・年度をまたいだとき作品の重複が発生しているが、これは研究目的と下記の分析観点から鑑みて別々にカウントすることが望ましいと考え、そうしている。

分析の観点は次のとおりである。「『朝の読書』で読まれた本ベスト 20」および青少年読書感想文コンクール自由図書部門過去の入賞作品の集計結果それぞれにおいて、次の 2 点を比較的に分析する。第 1 にフィクション作品の割合である。第 1 章で述べた通り中高生に人気がある本は小説などのフィクションであるが、それに対して学校の取組ではフィクションとノンフィクションの比率がどうなっているのかを検討する。第 2 に全体、およびフィクション作品における「学校で疎外されがちなジャンル」の割合である。どのようなジャンルが学校で疎外されがちであるかについては、今回は Wilhelm（2016）に依拠し、ロマンス（恋愛）、ディストピア、ファンタジー、ホラーをそれとし、分類を行った[6]。

分類は著者 1 名で行った。フィクション／ノンフィクションの区分は、出版社サイトならびにオンライン書籍販売サイトに掲載された情報から判断した。判別に苦心した書籍もいくつかあった。例えばフィクションに登場する事象を科学的な見地から検討している『空想科学読本』シリーズ（柳田理科雄 著、KADOKAWA）や、日本語教師が生徒とのやり取りなどから日本語学習にまつわるトピックを取り上げたマンガである『日本人の知らない日本語』シリーズ（蛇蔵＆海野凪子 著、KADOKAWA）、疑似科学的内容の『〇型自分の教科書』シリーズ（Jamais Jamais 著、文芸社。なお「〇」には A や B などの血液型名称が入る）などである。これらは完全にノンフィクションとは呼べない、あるいは分からないため、フィクションに分類している。

第 2 分析のロマンス（恋愛）、ディストピア、ファン

タジー、ホラーの分類も、同様の方法で行っている。

なお、本研究と同様に、中高生の青少年読書感想文コンクールの入賞作品を対象とし、ジャンルを分類した研究に米谷(2021)(2012)が存在する。それらはフィクションとノンフィクションとをジャンル分けし分析を行っているが、最終的な観点は作品ごとの入賞回数であり、本研究とは分析の観点が異なっている。

4. 調査結果：朝の読書と読書感想文の書籍ジャンル比較

(1) フィクション・ノンフィクションの比率

調査の第1として、朝の読書で読まれた本ベスト20と、青少年読書感想文コンクール入賞作品とにおけるフィクション・ノンフィクションの比率を集計した。結果は表1および表2のとおりである。

表1　朝の読書で読まれた本ベスト20における フィクション・ノンフィクションの比率

学校区分	フィクション	ノンフィクション	総計
中学校	121（93.8%）	8（6.2%）	129
高校	132（96.4%）	5（3.7%）	137

表2　青少年読書感想文コンクール入賞作品における フィクション・ノンフィクションの比率

学校区分	フィクション	ノンフィクション	総計
中学校	100（58.8%）	70（41.2%）	170
高校	102（63.4%）	59（36.7%）	161

朝の読書におけるフィクション・ノンフィクションの比率は、中学校でフィクションが93.8%、ノンフィクションが6.2%であり、高校でフィクションが96.4%、ノンフィクションが3.7%となっていた（表1参照）。どちらの学校でも圧倒的にフィクションが多かった。

これに対して青少年読書感想文コンクールにおいてフィクション・ノンフィクションの比率は、中学校でフィクションが58.8%、ノンフィクションが41.2%であり、高校でフィクションが63.4%、ノンフィクションが36.7%となっていた（表2参照）。どちらの学校でもフィクションの割合がやや多い結果であった。米谷（2012）によれば、2004年までは同コンクール自由読書部門でフィクション・ノンフィクションの応募区分があったが、2005年以降それがなくなり、フィクションの入賞作品が増えたという。とはいえそれは中学・高校ともに6割程度であり、極端に多いわけではない。

結果を比較すると、朝の読書で読まれた本ベスト20と青少年読書感想文コンクール入賞作品とでは、どちらもフィクションの割合がノンフィクションに比べ多かったものの、朝の読書では圧倒的にフィクションが多かったのに対し、青少年読書感想文コンクールでは6割前後であった。1章で述べたように、中高生の読書関心がフィクションへ中心的に向けられている現状からすれば、朝の読書でよく読まれている本にはその傾向がより強く現れていたと解釈できよう。他方で青少年読書感想文コンクールは、応募作品全体ではどのような比率かはわからないが、今回分析している入賞作品に限れば「評価」というフィルターがかかっていることから、よりノンフィクションの割合が高まっている可能性がある。すなわち、ノンフィクションを題材としたほうが評価されやすく、フィクション作品を題材とすると評価されにくいのかもしれない。これは中高生の愉しみの読書とは少なからず乖離があるだろう。

(2)「学校で疎外されがちなジャンル」の割合

続いて、朝の読書で読まれた本ベスト20と青少年読書感想文コンクール入賞作品とにおける、学校で疎外されがちなジャンル（ロマンス、ディストピア、ファンタジー、ホラー）の割合を、全体における割合とフィクション作品における割合とで集計した。結果は表3および表4のとおりである。

表3　朝の読書で読まれた本ベスト20における 疎外されがちなジャンルの割合

学校区分	作品数	全体における割合	フィクションにおける割合
中学校	64	49.6%	52.9%
高校	60	43.8%	45.5%

表４　青少年読書感想文コンクール入賞作品における疎外されがちなジャンルの割合

学校区分	作品数	全体における割合	フィクションにおける割合
中学校	2	1.2%	2.0%
高校	2	1.2%	2.0%

表３にあるとおり、「朝の読書で読まれた本ベスト20」における学校で疎外されがちなジャンルの割合は、中学校では作品全体の 49.6%、フィクション作品における割合は 52.9% と、約半数がそのジャンルに当てはまることがわかった。また高校もやや割合は下がるが似た傾向であり、作品全体の 43.8%、フィクション作品における割合が 45.5% であった。朝の読書は先に見たようにもともとフィクション作品の割合が高いが、そのなかにおいて学校で疎外されがちとされるジャンルの割合はそれなりに高かった。中学でも高校でもそれらのジャンルは生徒に人気が高く、また朝の読書活動ではあまり疎外されることなく生徒が読むことができていることが理解できる。

これに対して青少年読書感想文コンクール入賞作品では、中学･高校ともに２作品ずつしか該当しなかった。中学校では作品全体の 1.2%、フィクション作品における割合は 2.0% であり、また高校でも作品全体の 1.2%、フィクション作品における割合は 2.0% と同じ割合であった（表４参照）。ちなみにそれらの作品とは、中学では荻原規子 作『風神秘抄』徳間書店､(2008 年度）と、恒川光太郎 著『夜市』角川書店（2008 年度）であり、高校では島本理生 著『よだかの片想い』集英社（2017 年度）と、小泉八雲 著・平川祐弘 編『怪談・奇談』講談社（2018 年度）であった。いずれもライトノベルではない。これは、先の「朝の読書で読まれた本ベスト20」における疎外されがちなジャンルの作品に、ライトノベルが多数含まれていたのとは対象的であった。

この結果から言えることとして、まず朝の読書では Wilhelm（2016）が学校で疎外されがちとされたジャンルも寛容に認められており、多くの生徒は自分の好む本を選び読むことができていることが推察された。その一方で、青少年読書感想文コンクールではそうしたジャンルの本はほとんど評価されず、入賞することはほぼなかった。ライトノベルに至っては一冊も存在しなかった。先の結果からフィクション自体への差別は無いものと考えられるが、しかしジャンルについては、意識的にか無意識的にかは判別できないが、「良書」を選別するプロセスが存在している可能性が推察された。

5. 考察とまとめ：学校での愉しみの読書はいかに推進できるか

本研究では、まず研究背景として日本の中高生の不読率が改善傾向にあり、そこには全校一斉読書活動を中心とした学校での取り組みの成果がうかがわれることを説明した。さらに第２章において先行研究から、愉しみの読書が読解力向上に関係があること。そしてノンフィクションよりもフィクションを多読することこそが、読解力向上と関係する可能性が指摘されてきていることを述べた。くわえて、愉しみの読書はティーンエイジャーに対し、読解力だけでない、様々な効用を与えることも分析されてきていることに言及した。しかしながら、学校現場においては教員への忖度や、疎外されがちなジャンルが存在していることより、愉しみの読書を推進する上では矛盾が生じる可能性があることを指摘した。

そして調査として、日本の中学・高校での現状を理解するために、朝の読書（全校一斉読書活動）および青少年読書感想文コンクールを取り扱い、それぞれの取り組みにおいて公表されている記録から分析を行った。結果として、まず朝の読書で人気のある本のリストにおいては、フィクションが圧倒的多数を占めていた。またそのなかには、学校で疎外されがちとされるジャンルの本も多く含まれていた。このことから、全校一斉読書活動では子どもたち自身による自由な選書がある程度可能となっており、愉しみの読書を学校のなかで推進することが一定できている状況がうかがわれた。先行研究も考慮した上で述べるならば、おそらくその愉しみの読書の推進が、この 20 年間の中高生の不読率減少に寄与したのであろうと推察される。

他方で、青少年読書感想文コンクールの入賞作品には、中高ともにフィクションが半数以上含まれるものの、学校で疎外されがちなジャンルはまったくと言っていいほど見られなかった。このことは生徒に対して、愉しむ本と学校（あるいは社会）で評価される本とは異なっているという、ダブルバインドなメッセージを与えることになっていないだろうか。すなわち Wilhelm

（2016）が述べたように、子どもたちは学校の読書と「本当の読書」との間に、一線を引く戦略を取るようになるかもしれない。このことが「生涯の読者」を育てる上で、どのような影響を与えることになるのかは不明確であるが、成人してからの不読率を考えると中高、とりわけ不読率が高まる高校において、さらなる愉しみの読書の推進はされるべきではなかろうか。

米谷（2012）は、青少年読書感想文コンクールへの応募は「考える読書」であるとしている。そして、当時中学生に人気のあったケータイ小説『君の膵臓をたべたい』が青少年読書感想文コンクールで入賞していたことについて、「楽しむ読書としての自由な読書から、感想文を書く考える読書へと移行させた生徒がいた」と評価している（p.29）。しかし、この事例を評価することは、生徒自身の力量に過度に責任を負わせ、かつ例外として扱ってしまう可能性がある。そうではなく、中学・高校における「楽しむ（愉しむ）読書と考える読書の接続」は、学校での教育実践・政策として考えていかねばならないことと言えるだろう[7]。

本研究では朝の読書（全校一斉読書活動）と読書感想文コンクールとを調査対象としたが、学校での読書推進活動は各教科教育のなかでも行われる、多様なものである。そのため本研究の調査結果からの結論は十分に確かなものであるかどうかは、さらなる分析が必要である。また、ライトノベルのような軽い物語の読書も読解力向上につながるのかどうかなど、愉しみの読書がもたらす意義はまだ十分に明らかとは言えない。それも今後の研究課題と言える。

注

[1] 2021 年までは全国学校図書館協議会、毎日新聞社の共催で実施。2022 年は全国学校図書館協議会が実施。

[2] Cremin（2020）によれば、愉しみの読書（Reading for Pleasure）はイギリスで主に広がっている用語であるが、英語圏の他の国でも同様の概念はあり、例えばアメリカでは「フリーボランタリー」「インディペンデント・リーディング」、カナダでは「レクリエーション・リーディング」と呼ばれるとしている。またそれらは、意味としては「基本的には、あらゆる種類のテキストを自発的に選択し、読むこと」（p.92）であるともしている。また余暇の読書（Leisure Reading）とも近しい概念である。

[3] ただし大橋（2016）は「ライトノベルにはあまりにも多様な小説がそのなかに組み込まれており、ライトノベルという用語や枠組みだけを以てなにかを語ることは、きわめて難しい状況」（p.15）と、ライトノベルを分析することに注意深い立場でいる。また別の著述において、近年のブックガイドでは、かつての良書主義に陥らないように留意しつつ、子どもたちの興味関心に寄り添う形でより多様な本を紹介するものが増えていることを評価するなど、愉しみの読書を全て否定しているわけではない（大橋 2023）。

[4] 低学力国で負の相関が見られた原因は Cheema（2018）によれば、欠落した変数バイアスによって引き起こされた（見落としている重要な変数が影響を与えている）可能性がまず述べられている。しかし同時に、その国固有の経済・文化的な要因が大きいのではないかとも Cheema（2018）は指摘する。同研究のサンプルに含まれる成績の低い国々は、一般的に発展途上国である。学校における経済的資源の不足が娯楽用の読書教材の量と質の両方を低下させ、ひいてはそのような国々における読書の楽しみのレベルを低下させる原因になっている可能性があると推測している。また文化の違いとしては、たとえば娯楽活動は時間の無駄とみなされ、親が子どもたちに読書を楽しむことを積極的に勧めない傾向の国では、子どもたちは読書の楽しさをより低く見積もる可能性があるとしている。

[5] なおこの調査結果は前回調査（2016 実施、2015 年度末現在の状況）よりも実施校の割合が小中高すべてにおいて下がっているが、これは新型コロナウイルス感染拡大の影響も考えられ、一時的なものの可能性もあり、一概に取り組みが下火になってきているとは判断し難いだろう。

[6] Wilhelm（2016）による「学校で疎外されがちなジャンル」の例示には「ヴァンパイア」が含まれているが、日本では分野的な分類としてあまりメジャーではなく、またファンタジーとホラーにも包含できるために、今回の分類では使用しなかった。

[7] その意味で、一般財団法人 出版文化産業振興財団が 2021 年から年 1 回行ってきている「マンガ感想文コンクール」は興味深い。同コンクールで推薦され、また入賞しているマンガ

作品は、学校で疎外されがちなジャンルも含みつつ、きわめて幅広い。しかも同コンクールでは、対象から学習マンガ（歴史や科学などの教科学習を文章ではなくマンガにしたもの）が除かれており、愉しみの読書からの応募であることが徹底されている。

参考文献一覧

Cheema, J. R.（2018）. Adolescents' enjoyment of reading as a predictor of reading achievement: new evidence from a cross-country survey. Journal of Research in Reading, 41（S1）, S149–S162.

Cremin, T.（2020）. Reading for Pleasure: challenges and opportunities. In J. Davison & C. Daly（Eds.）, Debates in English Teaching. Debates in Subject Teaching. London: Routledge. pp. 92–102.

深谷素子 .（2011）. 読書指導の場としての多読授業 : 慶應義塾外国語教育研究 , 8, 69–90.

林公 .（2007）朝の読書：その理念と実践 . リベルタ出版 .

Ivey, G., & Johnston, P. H.（2013）. Engagement With Young Adult Literature: Outcomes and Processes. Reading Research Quarterly, 48（3）, 255–275.

Jerrim, J., & Moss, G.（2019）. The link between fiction and teenagers' reading skills: International evidence from the OECD PISA study. British Educational Research Journal, 45（1）, 181–200.

薬袋秀樹 .（2012）. 朝の読書の評価に関するアンケート調査 : 意義と問題点 . 日本生涯教育学会論集 , 33, 103–112.

野口久美子 .（2009）. 小学校・中学校における読書指導の実践に関する報告記事の分析 : 全国学校図書館研究大会を事例として . Library and information science,（62）, 111–143.

大橋崇行 .（2016）. 中学生・高校生による読書の現状とその問題点 ―ライトノベルの位置と国語教育、読書指導―. 東海学園大学研究紀要 : 人文科学研究編 ,（21）, 9–21.

大橋崇行 .（2023）. 研究展望 新学習指導要領と中学生、高校生の読書 . 昭和文学研究 ,（85）, 171–174.

折川司 .（2019）. 読書量・不読率の改善の陰で低下する中学生読書の質 . 言語表現研究 , 35, 11–24.

Wilhelm, J. D.（2016）. Recognising the power of pleasure: What engaged adolescent readers get from their free-choice reading, and how teachers can leverage this for all. Australian Journal of Language and Literacy, 39（1）, 30–41.

米谷茂則 .（2012）. 2000 年から 2009 年までの 10 年間に児童生徒が読書した作品：全国読書感想文コンクール入選の読書対象作品の集計及び 5 月読書の統計から . 読書科学 , 54（1–2）, 29–42.

米谷茂則 .（2021）. 2010 年から 2019 年までの 10 年間に児童生徒が読書した作品：全国読書感想文コンクール入選の読書対象作品の集計及び 5 月読書作品の統計 . 明治大学図書館情報学研究会紀要 ,（12）, 23–33.

Zare, M., Kozak, S., Rodrigues, M. L., & Martin-Chang, S.（2023）. The roots of reading for pleasure: Recollections of reading and current habits. Literacy, xxxx, 1–13.